

喪のロゴセラピー

—絵本『フレデリック』からの一考察—

山本孝子

“愛する息子・洋輔に捧ぐ”



はじめに

人生には、突如として思いもかけないことが起こるものです。しかし人間は、その過酷な運命にただ翻弄されるだけの存在ではありません。その運命に対しどのような態度を取るかは自分で決めることができるのです。

本稿では、自身の喪の作業にロゴセラピーがどのように役立ったか、その魔法のような効果について具体的に論じたいと思います。

1. 寒くて暗く長い灰色の冬の日々の始まり

その日は、突然やってきました。2011年10月4日、普段から偏頭痛がするとよく言っていた息子が、よほど痛みがひどかったのか、その日近所の脳外科へ。脳血管の病気が見つかり、すぐに大阪の名医のいる病院で再検査することになりました。その結果、早急に手術が必要と言われ、10月29日に手術することになりました。16時間にも及ぶ手術は成功しました。

ところが安堵したのもつかの間、容態が急変し、11月5日、広島から駆け付けてくれた友人を含め10人ほどの人たちに見守られながら静かに息を引き取りました。まだ31歳。たくさんの夢を思い描いていたであろう